

子どもの非認知能力の育みを支える
キリスト教保育に関する一考察
——キリスト教保育用絵本を手がかりにして——

A Study on Christian Childcare to Support the Developing
of Childrens Non-cognitive Skills:
Using Christian Childcare Picture Books as a Clue

國光 みどり

Midori Kunimitsu

はじめに

厚生労働省『保育所保育指針解説』（平成30年）は、乳幼児期の「社会情動的側面における育ち」について、「様々な研究成果の蓄積によって、乳幼児期における自尊心や自己制御、忍耐力といった主に社会情動的側面における育ちが、大人になってからの生活に影響を及ぼすことが明らかとなってきた」（同『解説』 pp.3-4）と指摘している。これは、乳幼児期における保育者や他の子ども達とのコミュニケーションのあり方如何が、その子どもの生涯にわたる生き方に大きな影響を与えることを指摘するものである。また、そこでは「非認知」的（noncognitive）な心の性質、つまり、シカゴ大学のジェームス・ヘックマン（James Heckman: 1944-）教授によって提唱された「非認知能力」というIQ（Intelligence Quotient）で説明しえない心の性質に関わる社会情動的側面の育ちが、乳幼児の早期に保育・教育の中で獲得されることが示唆されている。つまり、「非認知」的な力が「認知」される力と共に生涯を通じて不可欠なものとして位置づけられているのである。

拙論「子どもの非認知能力の育みを支える幼児教育に関する一考察—キリスト教保育・音楽の視点から—」（2022年）では、国立教育政策研究所のプロジェクト研究「非認知的（社会情動的）能力の発達と科学的検討手法についての研究」（平成27(2015)–平成28(2016)年度）¹⁾を参考にして、研究代表者である遠藤利彦教授が提示された非認知能力の具体的な構成要素を基準とする考察を行った。すなわち、自己に関わる心の力とされている9つの構成要素における、「自尊心」および「自己肯定感」の育みという視点から、子どもの「目に見えない力」を育む保育実践のあり方として、キリスト教保育を取り上げて、それへの考察を行った。子どもの存在や命に最高の尊厳性と価値が示

されている聖書箇所（マタイ11：25以下、18：1以下）を根拠として、「世界の幼児の保育はキリスト教保育に始まって、キリスト教保育と共に歩み、発展したと言っても過言ではない」²⁾ という保育の原点に位置づけられたキリスト教保育の意義について明らかにした。その上で、キリスト教保育の過程で子どもの非認知能力を育むために重要な意味を有するキリスト教保育と音楽との関係性を A. L. ハウ（Hawe, Annie: 1852-1943）の実践を取り上げて考察し、音楽が保育にどのような意義と役割をもたらすのかを示した。

本稿においては、遠藤利彦教授が OECD による「非認知能力」の概念的枠組みを分類し、〈自己と社会性に関わる心の力〉および〈社会性に関わる心の力〉とに再定義した「表1：非認知能力の具体的な中身－理論的な視点からのまとめ」³⁾ を参考にして、キリスト教保育用「こひつじ文庫」に採択されている絵本を手がかりにした考察を試みることにする。絵本を用いたキリスト教保育の実践と子どもの非認知見ええない心の力を育む保育との関係に焦点を当てて、キリスト教保育に用いている絵本が自己・社会性に関わる心の育ちを如何に支え、育むことができるのかについての考察を試みてみたい。

1. 日本の幼児教育・保育に求められる「見ええない心の力の育み」

子どもを取り巻く現代の状況は、政治的紛争や著しい気候変動など人類の生存に関わる問題が山積している。また、科学技術の急速な進歩による高機能 AI（人工知能：Artificial Intelligence）の出現により、私達が望めばありとあらゆる情報や知識を容易に獲得できる時代となってきている。錯綜する情報化の中で、多様な価値観の氾濫、善悪の判定の曖昧化に直面している時代の中に私達は置かれているのである。遠藤利彦教授はこのような時代を「VUCA」時代と特徴づけて、「VUCAとは、Volatility（激動）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）」という4つの言葉の頭文字を並べて作られた言葉であるとしている。この「VUCA」の時代を「たくましく生き抜いていかななくてはならない子どもたちがどのような心の力を身に付けておくべきなのか」という議論も盛んになってきている」⁴⁾ という認識から、子どもがこのような時代を生き抜くために必要とされる心の力について、「従来のようにコンテンツを頭のなかにただたくさん詰め込み、それらを基に、あらかじめ決まっている正答解をはじき出せる力では必ずしもなくなってきている」と指摘している。この力は、「この先どうなるか不透明な状況に対して、適宜その都度、自身の頭で考え判断し、自ら目標設定する力、そしてその目標に合わせて、外在化して在る多種多様なコンテンツのなかから必要となる情報や知識を主体的に選択し集め、柔軟に対処していくための力であり、独り善がりではなく、様々な他者と対話し、手を携え協力し合いながら進めていく力」である⁵⁾ と述べている。このように遠藤教授は、現代に生きる子どもが未来社会を生き抜くために備え持たなければならない目に見えない心の力について言及し、日本における幼児教育・保育に求められる乳幼児期に育むべき心の力について重要な示唆を与えている。

2. キリスト教保育と見えない心の力の育み

日本の多様化する保育現場では、特定の宗教的理念に基づいた保育も行われている。そのような日々の保育場面においては、特定の宗教的な見方や考え方を通して、道徳観、倫理観、価値観等を生活や遊びを通して実体験の中で学ぶことになる。また、自然事象など人間の力では及ばないものに対する畏敬の念をもつこと、命の循環への気づき等、信仰を通じた保育・教育も、子どもの心の育ちに働きかける実践として特定の宗教的理念に基づいた乳幼児保育・教育に取り入れられている。つまり、キリスト教保育とは、イエスを救い主（キリスト）と信じる教会という信仰の共同体の中に子どもを受け止め、子どもに働く神の恵みと祝福を信じて子どもを育てるための活動にほかならない⁶⁾。

日本にフレーベルの幼児教育思想に基づくキリスト教保育を普及したのは、A. L. ハウ（Hawe, Annie L.: 1852-1943）であるが、ハウが展開したフレーベリズムは、形式、理論および方法だけではなかった。ハウはフレーベルのキリスト教への深い信仰に基づく教育理念をも伝えたのである。このようなハウの幼稚園教育論は、保育の目的として以下の5項目を挙げている。すなわち、①自然界における神の働きに対し、敬虔な愛と賛美の念を起こさせ、神への信仰を喚起すること。②よいお話や教材、ことに聖書の話を通して子どもの想像力を豊かに育てること。③神から与えられた賜物である音楽に対する真の感情を養うこと。④世界の人類は互いに兄弟姉妹であり、互いに助け合う責任のあることを心と脳裡にしみ込ませること。⑤生涯を善良で正しく過ごせるようによい習慣を奨励すること⁷⁾。これらである。

ハウの教育・保育論は当時のキリスト教保育に大きな影響を与えただけでなく、現代社会に生きる子どもの教育・保育に応用可能な教育・保育理論といえよう。

3. 「こひつじ文庫」の絵本の選定

「KiriShin」⁷⁾によれば、「こひつじ文庫」と呼称されるキリスト教幼児教育ブッククラブは、こぐま社、福音館書店、至光社、の3社が軸となって、女子パウロ会、日本キリスト教団出版社、岩波書店、の協力の下に設立され、1982年に活動を開始した団体とされ、「こひつじ文庫」には全国のキリスト教書店が特約店として参加し、保育園・幼稚園・こども園との窓口になっている。特徴ある絵本ブッククラブを志向する「こひつじ文庫」が選定する絵本は、キリスト教幼児教育の一環をなすものとしての特色を有し、聖書のテーマ（信仰・希望・愛・平和など）を盛り込んだ絵本、美しい自然、豊かな季節を賛美した絵本、あるいは優しく、楽しく、しかも感動して繰り返し、繰り返し読む絵本として特徴づけられ、絵本として優れたものとされている。

「こひつじ文庫」の絵本は、出版社が絵本を選定するのではなく、キリスト教幼児教育専門家によって選定される。つまり、長年幼児教育や絵本に携わり、豊かな経験と専門の知識を持ったアドバイザーが選定を行うアドバイザー制度が導入されているのである。キリスト教幼児教育専門家であるアドバイザーが選んだ絵本をもとにして、「こひつじ文庫」の絵本選定に長年携わってきた長山篤子泉短期大学特任教授が最終的な絵本選定に関わるとされている。ちなみに、長山教授は絵本選

定に際して、「こひつじ文庫」創設の理念であるキリスト教信仰に基づいて子どもたちに呼びかけることを重視する視点から、次のような絵本選定の基準を掲げて居る。すなわち、「子どもの生活体験が豊かに再現され幸せを感じさせるもの、文章に用いられている『ことば』が、子どもが経験する『ことば』と一致していること」、「子どもの心の経験が表現されているもの」、「芸術的、美術的センスに富むもの」、「文と絵が乖離していないこと」、物語として想像性を豊かに感じさせるもの、指定出版社より推薦を受けたもの、という7つの基準を独自の絵本選定基準として掲げている。

このような基準により選定されている絵本において、育みたい心の力は、どのように関係し、取り扱われているのか。この点の解明が課題となる。

4. キリスト教保育6つのねらいと「身に付けておくべき心の力」の関係

キリスト教保育のねらいは下記の6項目とされている。ここではその6項目のねらいをさらに遠藤教授が分類した「表1：非認知能力の具体的な中身－理論的な視点からのまとめ」の〈自己に関わる心の力〉〈社会性に関わる心の力〉の視点から特徴づけを行い、キリスト教保育のねらいが関係する非認知能力の中身を考えてみたい。

キリスト教保育指針における〈はじめに〉において、キリスト教の理念に基づく「子どもは大人の恣意のもとに置かれ、『子どものため』という大義名分のもとに親や社会、また国の意図する方向に育てられる場合が多い。私たちの行う保育が単に子どもに現在の社会や生活態度や価値観を再生産する手段となるのではなく、子どもを将来に向けて羽ばたかせる働きとなることが求められている。特に、子どもが自分をみつめ、自分で将来を選びとることができる者として、自分自身を隣人と共に生きる観点からみつめることのできる者として育つことが求められる」⁸⁾と述べ望ましい乳幼児期の保育・教育の方向性を示している。すなわち、このように、子どもが隣人を愛し、自分自身を隣人と共に生きる視点からみつめ、自分で将来を選び取ることができる者として育つことを求めるキリスト教保育指針は、遠藤教授の主張する言説、すなわち世の中の目まぐるしい動きや見通しの不可能な社会の変化に対応して、子どもがたくましく生き抜くために心の力を身に付けることを求める言説と深く重なりあっていると見える。

(1) キリスト教保育における6つのねらいと、表1非認知能力の具体的な中身との相関

★は自己に関わる心の力を示す。☆は社会に関わる心の力を示す。

- ① 子どもが、自身を大切なひとりとして受け入れられていると感じとり、自分自身を喜びと感謝をもって受け入れるようになる。 「自尊心」★「自己肯定感」★
- ② 子どもがイエスを身近に感じ取ることを通して、見えない神の恵みと導きへの信頼感を与えられ、「イエスさまとともに」毎日を歩もうとする思いをもつようになる。 「自己効力感」★
- ③ 子どもが、互いの違いを認めつつ、一緒に過ごす努力をし、そのことを喜びとするようになる。 「自己理解」★「コミュニケーションをとる力」☆「共感性」☆「思いやり」☆「共感性」☆「協調性」☆「協同性」☆

- ④ 子どもが、心を動かし、探求し、判断し、想像力をもち、創造的にさまざまな事柄に関わるようになる。 「好奇心」★「意欲」★「グリッド」★
- ⑤ 子どもが、私たちの生きる自然や世界を神による恵みとして受けとめ、それらの事柄に関心をもち、自分たちのできる事を考え、行うようになる。 「内発的動機付け」★「自律性」★「自立心」★
- ⑥ 子どもが、してはいけないことをしようとする思いが自分の中にあることに気づき、そのような思いに負けない勇気をもち、行動するようになる。 「自制心」★「道徳性」☆「規範意識」☆

5. キリスト教教育と絵本「こひつじ文庫」を手がかりに

(1) 絵本とはなにか

絵本は保育の場において、子どもたちが容易に手にすることができる、子どもにとって身近な対

表1 非認知能力の具体的な中身－理論的な視点からのまとめ⁹⁾

<p><自己に関わる心の力> ★</p>	「自尊心」「自己肯定感」	自分を愛し自分の性質や能力に自信をもつ
	「自己効力感」	やればできるはずという感覚
	「好奇心」「意欲」	おもしろいことだったらもっとやってみたいと考える力
	「内発的動機付け」	心の内側から湧いて出てくる動機付け
	「自制心」	自分の衝動を抑え自分の行動をコントロールしようとする力
	「グリッド」	目標に向かって我慢強くやり抜く力
	「自己理解」	自分自身の特徴や状態などをちゃんと認識できる力
	「自律性」「自立心」	自分の頭で考え自分の意思で決めて自分の力で行動しようとする力
異時点間の選択のジレンマを解決するための感情の制御(コントロール)		
<p><社会性に関わる心の力> ☆</p>	「心の理解能力」	他の人の心の状態を適切に理解するための力
	コミュニケーションをとる力	心の理解を基に他の人と適切にコミュニケーションできる力
	「共感性」「思いやり」	誰かが困っていたら自然にかわいそうと思って助けようとする力
	「協調性」「協同性」	他の人と助け合いながら事を進めていく力
	「道徳性」	何が良くて何が悪いかを判断する力
	「規範意識」	社会や集団のルール・決まり・常識などを理解して守ることができる力
	自他間の選択のジレンマを解決するための感情の制御(コントロール)	

象である。キリスト教保育と絵本の関係を考察するにあたって、「絵本とはなにか」について触れておこう。

正置友子元聖和大学教授は、その確固たる定義は存在しないと指摘しつつも次のような特徴づけを行っている。正置元教授は、絵本の定義の一例として、アメリカの子どもの本の研究者であるバーバラ・ベイダー (Barbara Bader: 1972-) の絵本の定義を取り上げ、次のように述べている。すなわち絵本とは、「①言葉、イラストレーション、トータルデザインから成っており、②機械で製造されたものであり、商業的な製品である。③社会的、文化的、歴史的記録であり、④最も重要なことは、子どもにとってのひとつの経験である」とされる。またそれは、「芸術形態としてみれば、①絵と言葉の相互依存、②向かい合う2ページの見開き、③ページを捲っていくことで現れるドラマ、で成立している」ものであるとされる。すなわち、絵本というものは、無限の可能性をもっているというバーバラ・ベイダーの絵本の定義において、絵本は「子どもにとってひとつの経験である」と言い切っている箇所が目される。「絵本は子どもにとってひとつの体験であると言うとき、絵本という表現方法から、絵本を共に楽しんでいるほかの誰かを想定できる。子どもは経済力、行動力を持たないため、自分ひとりで絵本を手に入れることは不可能である。両親や祖父母がその子のことを念頭において手に入れ、その子に向かって、幼い子の場合は膝に抱いて、読んでやるという行為が伴う。そこで、子どもは絵本自体を体験するが、年齢が低ければ低いほど、年長者と共に体験する、と考えられる。乳幼児の場合、絵本は、子どもにとってひとつの体験であり、かつ年長者と共にする体験である。幼い子どもにとっては、年長者の存在なくしては、絵本そのものも存在しない。」¹⁰⁾ このように述べている。ベイダーは乳幼児が年長者と共にする体験だとする絵本というものは、無限の可能性を持っているという絵本についての定義に到達しているのである。

以上に述べたことから明らかなように、絵本の読み手として年長者の存在が重要であり、絵本そのものの価値や意義だけでなく、子どもと共に絵本を体験してくれる年長者の存在とその感性こそが大きな役割を担うことになる。

このように絵本は、絵本そのものの意義や価値だけでなく、子どもが年長者と共にする体験をも含むものであるという視点から、絵本とは何かが理解なされなければならないだろう。

(2) 絵本を読み聞かせてもらうことの意義

板橋富士見幼稚園の安見克夫園長は、年長者と共にする体験だとする絵本の意義をさらに推し進めて、絵本を親に代わるものと位置付けている。すなわち、「絵本は親の温もりを感じられるものであり、身近な大人の膝の上などで温もりを感じながら読んでもらったその行為自体が子どもの心に宿っているのです。絵本は親の温もりを感じることができるもので、親に代わるものです」¹¹⁾。その意味するところは、以下の通りである。2歳頃までの子どもが絵本を読んでもらっている時には、絵本の内容にはさほど興味をもっているわけではなく、読み手の声が聞こえて、読み手と同じ空間・時間・ぬくもりを共有できることを喜んでいるのである。その子どもが絵本を読んでもらいたいと絵本を持ってくる気持ちの裏側にあるのは、家庭での温かな記憶なのである。この記憶の刷り込みを

保育者が子どもと共に再現しようとする場合、子どもの行為の裏側の思いに気づき、受け止めながら活動を行うことが重要である。つまり、保育者は、子ども自身の心の力の立ち上がりを牽引し、保育者の活動を子どもの自尊心、自己肯定感等の見えない心の力を育む活動へと繋いでいかなければならないことになる。安見園長は絵本のページとページの間を埋める子どもの想像力に着目して次のように述べている。すなわち、「絵本のストーリーに自分の中から湧き出た想像のストーリーを絡め、新たなストーリーを生み出しながら聞いています。(中略)子どもの想像によって絵本のページとページの間が埋められているのです。ページとページの間を想像してつないでいるわけですから、絵本のどこから参加してもよいですし、途中離脱している子も必ず声は聞いていて、頭の中では想像世界が広がっています」²⁾ このように、子ども自身が絵本を読んでもらう過程において、自分自身の想像力を働かせる楽しさを体験することになる。保育者の活動の意味は、子どもの心の内側から湧き上がってくる様々な想像を、絵本の世界で意欲的に具現化する経験へと導いていくことにあるといえる。

したがって、子どもに対する絵本の読み聞かせという保育者の活動は、非認知的な能力の具体的な中身である「内的動機付け」を醸成させる活動として位置づけることができるのである。

(3) キリスト教保育に用いる絵本にみる育みたい心の力（絵本の一例）

『こひつじ文庫』選定における3歳児を対象とする絵本を、①お話の特徴、②見えない心の力との関係、③キリスト教保育との関係という視点から、その特徴を簡潔に示すと以下ようになる。

4月『あーそーば』. やぎゅうまちこ作. 福音館書店. 2012.

- ① 人間だけに限らず、登場する動物たちは、人種を問わずみんなが仲良く自分中心ではなく相手の立場になって遊び、楽しむ嬉しさ、楽しさ。
- ② 「心の理解能力」☆「コミュニケーションをとる力」☆
- ③ 詩篇133章1節、ローマ人への手紙12章15節、ピリピ人への手紙2章3-5。喜んでいる者たちと共に喜び、泣いている者たちとともに泣きなさい。

5月『まいったなあ』. いもとようこ絵・文. 至光社. 2010.

- ① 本当に大切なものは何だろう。失ってみて初めて気付くものである。
- ② 「心の理解能力」☆「共感性」☆こどもの心の経験。
- ③ 箴言3章27節：あなたの手に善を行う力があるとき、求めるものにそれを拒むな。

6月『かばさん』. やべみつのり作. こぐま社. 第10刷. 2020.

- ① カバを見に行った体験、色々な発見を再現するみつこを受け止め温かく受け止める父。背負われ、包み込み、守られる安心感。
- ② 「好奇心」★「意欲」★「自律性」★「自立心」★
- ③ イザヤ書46章4節。わたしは背負う、わたしは運ぶ。

7月『いのり』. まつむらまさこ絵・詩. 至光社. 2020.

- ① 子ども達が見つける毎日の幸せ。美しい地球。

② 「道徳性」☆「規範意識」☆

③ 気付かない日常、神様に与えられた当たり前のことに目を向け感謝する。創世記1章。

1月『ヌードル』。M. リーフ文・L・バーメルマンズ絵・福本友美子訳。岩波書店。2003。

① 自分自身に与えられた容姿に不満をもつヌードル。多様な友だちとの出逢いから、自分は自分が一番良い、という結論を得られた。

② 「自尊心」★「自己肯定感」★

③ ルカによる福音書15章3～7。あなたはあなたであってよい。あなたが大切である。

以上に示されていることから、「こひつじ文庫」選定による絵本を通して、神のゆるぎない愛をちりばめたお話の内容とともに、読み手である保育者の愛の眼差し、手の温もり、優しい語りかけなどから、子どもは身近な自分を愛してくれる人へのゆるぎない信頼感を感じ取る。それら全てが相乗的に働き、子どもの見えない心の力を育む方向へと有効に作用していると考えられる。

おわりに

今日、人工知能やロボットの分野における進歩には目覚ましいものがある。しかしながら、人工知能によって他者との協調を必要とする職業などを代替することは難しいとする見方も存在する。「芸術・哲学・神学など、抽象的な概念を整理する知識を要する職業、他者との協調を要する職業については人工知能での代替は難しい」¹³⁾ とする見方を示している。この見方は、保育の領域、つまり保育者が担う人が人を育て育むいとなみである乳幼児期の教育・保育の領域についても妥当する。保育の領域は決して人工知能が代替できない領域であるといえる。

本稿において、雑駁ながら、子どもがキリスト教保育と出逢い、目に見えない神との対話の中で、愛され、護られ、育まれていく揺るぎない生きる力の育みについて、「こひつじ文庫」に選定されている絵本を用いた若干の考察を試みた。

子どもの見えない心の力、別言すれば、「非認知」的な力を育む方向に作用するという点について、不十分ながら示すことができた。しかしながら、キリスト教保育に用いる絵本の有効性について本質的理解がなされたとは言えず、依然、課題として残されている。その本質的理解を今後の研究課題としたい。

引用文献

- 1) 「非認知的(社会情緒的)能力の発達と科学的検討手法についての研究報告書」の概要について <https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h28a/syocyu-2-1_s.pdf> (2023年8月13日15時)。
- 2) 青木敬和。(1988). 新・キリスト教保育者必携：(社)キリスト教保育連盟。(p.9)。
- 3) 遠藤利彦。(2022). 非認知能力なるものの発達と教育. 発達. 170. (p.5)：ミネルヴァ書房。
- 4) 遠藤利彦。(2022). 前掲書。(p.3)。

- 5) 遠藤利彦. (2022). 前掲書 (pp.3-4).
- 6) 一般社団法人キリスト教保育連盟. (2015). 新キリスト教保育指針：(社)キリスト教保育連盟. (p.12).
- 7) こひつじ文庫. 「子どもの心に響く絵本を」選定の心がけを永山篤子氏に聞く. 2011年2月26日.
(<http://www.kirishin.com/2011/02/26/28732/>) (2023年8月5日10時).
- 8) 一般社団法人キリスト教保育連盟. (2010). 新キリスト教保育指針：(社)キリスト教保育連盟. (p.4).
- 9) 遠藤利彦. (2022). 前掲書. (p.5).
- 10) 正置友子. (2013). 日本における子どもの絵本の歴史：千年にわたる日本の絵本の歴史 絵巻物から現代の絵本までその1. 平安時代から江戸時代まで. (pp.83-84). メタフシカ. (大阪大学). (pp.81-98).
- 11) 安見克夫. (2016). 絵本が好きになる子. (pp.10-11). 保育ナビ第6巻第12号：(株)フレーベル館.
- 12) 安見克夫. (2016). 前掲書. (pp.10-11).
- 13) 日本の労働人口の49パーセントが人工知能やロボット等で代替可能に～601種の職業ごとに、コンピューター技術による代替確率を試算～. AIによって代替される仕事 / 代替されない仕事. (https://www.nri.com/-/media/Corporate/jp/Files/PDF/news/newsrelease/cc/2015/151202_1.pdf) (2023年8月13日15時15分).

参考文献

- 國光みどり. (2023). 子どもの非認知能力の育みを支える実践的教育に関する一考察－キリスト教保育・音楽の視点から－. 豊岡短期大学論集第19号：豊岡短期大学.
- 新日本聖書刊行会誌. (2017). 聖書新改訳2017：いのちのことば社.

